

「関係作りによって活動意欲向上し、行動範囲の拡大に繋がった症例」

医療法人社団 赤心会 赤沢病院 生活療法課

○浅野 隆三

key word / 関係作り、活動意欲向上、行動範囲の拡大

【はじめに】

摂食障害患者に対して作業療法の役割は、関わり方によって異なってくるとされている。今回、症例に対してリハビリテーション（以下リハビリ）での関わりから活動意欲が向上し行動範囲の拡大に繋がった為、以下に報告する。尚、今回の報告において症例に報告趣旨を説明し、書面にて同意を得た。

【事例紹介】

50歳代女性。診断名、摂食障害、変形性腰椎症。大学卒業後帰省、両親と生活し銀行職へ就職するも父親の介護のため退職。X-7年に父親が他界後、食欲低下みられ通院にて治療を続けるも徐々に体力低下し、自宅でも臥床時間が増え食事がとれなくなった。メンタルヘルス科へ転科にてリハビリを行うも効果が見られず当院へ入院となった。

【OT 評価】

病棟生活は、車イスを使用されポータブルトイレ使用時のみ移乗。他患との交流は、接触をさけるためベッド上で食事をとられ、一日ほとんど臥床。ROM 制限なし、GMT は四肢 3 レベル。BI は 75 点で歩行、階段、入浴に減点。体重は 32kg、BMI13.49。性格は非常に神経質で固執しやすく、食への拘りや偏食あり。また、身体的な不定愁訴や OTR への要求が多く、リハビリへの意欲が乏しい。目標は、早く歩けるようになりたいと言われ活動意欲や下肢筋力の向上、行動範囲の拡大を目的に毎日 20 分から 40 分リハビリを実施した。

【経過と結果】

【Ⅰ期目：関係作り、楽しむ活動を提供した時期】(X-3年11月～X-2年4月)

介入当初は、症例の要望から自室にて車イス座位で実施。声掛けに対し表情険しく返答なし。毎日運動する事に対しては否定的な発言あり。運動時は息苦しさや肋骨の痛みなど不定愁訴多くそれに対して固執し、疲労や中断が見られた。その為、症例との関係作りを運動への動機付けとし、興味、関心のある話題を提供しながら自己表出を促した。また固執に対しては、主体的に取り組める運動やゲーム内容に変更し、軽く疲労が残る程度の運動量に調整することで楽しく取り組めるように対応した。「本当にできていますかね」と自己評価や自信の低下がみられる為、できている際には症例にその都度フィードバックを繰り返して行った。

【Ⅱ期目：訓練に対して意欲的に取り組まれ、行動範囲が拡大した時期】(X-2年5月～X-3月)

症例との関係性が少しずつ生まれると笑顔や自己表出が増え、不定愁訴は減少。参加頻度は、週3日から週5日に増えた為、リハビリ室までの参加を促し平行棒内で起立訓練を開始した。リハビリ以外の時間では、「自分でできる運動がしたい」と希望され起立訓練を提案した。立位保持は体幹の前傾が強い為、前腕支持型歩行器に変更すると「歩けるかな」と意欲ある発言が聞かれた。歩行距離を自室から伸ばすことで歩行バランス安定した為、交互型歩行器へと変更した。平行棒内歩行では両手から片手、応用歩行（階段昇降、横歩き）へと段階付けた。そうすると「自動販売機まで一人で行けるようになりたい」と言われ、訓練として取り入れた。訓練以外では病棟スタッフ付き添いで自動販売機まで約 30 m 歩かれていたが、自身で行けるようになり、BI は 75 点から 100 点となった。体重は、32kg から 38.5kg、BMI13.49 から 16.23 へと変化した。

【考察とまとめ】

介入時は、不安や自信の欠如からリハビリに対して消極的となり活動意欲が低下していた。そのため、症例との関係作りから興味、関心を引きだし、楽しく取り組めるように関わった事で症例自身も運動への必要性を感じ、容易に取り組めるように変化したと考える。また、できている運動に対しては、その都度フィードバックを繰り返したことによって自己効力感が高まり、活動意欲も向上した。そして、生活の中から目的ある目標を持つことができ、行動範囲の拡大に繋がったのではないかと考えられた。最後に症例にとって関りの中から目標や自信を持つことは、残存能力や潜在能力を高める事につながり、そこから自分らしい生き方や価値観を見出すことで、目的を持った生活を送れるようになったと再確認することができた。